

教員養成大学における合唱の遠隔授業

—遠隔と対面による実践の成果と課題—

*原 田 博 之

The remote chorus classes at a teacher training college:
Achievements and challenges of the practices of combining online with face-to-face learning

HARADA Hiroyuki

Abstract

This article deals with the practices of the chorus classes under COVID-19 at Miyagi University of Education in the first semester 2020. We tried to have online classes from May, and then gradually restarted face-to-face learning from the end of June. In the chorus classes, the students were divided into three groups, and participated online and face-to-face learning by rotation. At first the chorus classes centered on listening to music online, but after in-classroom classes were allowed partially, not only the face-to-face but also the online members came to the realization that they were taking part in the class. I describe below the details of the educational process and the students' activities.

Key words : 合唱, 遠隔授業, 対面授業, 音楽実技, 教員養成

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大が広がりつつあった2020(令和2)年の3月以降, 文部科学省をはじめ, 各教育委員会や各演奏関連団体など, 音楽活動に関しても様々な感染対策のガイドラインが告示された。3月24日に文部科学省(2020)から通知されたガイドラインでは, 各教科等の指導について「感染の可能性が高い一部の実技指導などにおいては, 指導の順序の変更の工夫などが考えられる」とされた¹。その指針に基づき3月26日に東京都教育委員会(2020)から通知されたガイドラインでは, 「音楽においては, 歌唱の活動や管楽器(リコーダー等)を用いる活動は行わない」と具体が示された²。5月に仙台市教育委員会(2020)

から出された通知では, 「年間指導計画を見直し, 鑑賞や創作(リズム創作等の発声を伴わないもの)から指導を行う」と示されている³。

学校教育における音楽科や芸術科音楽において, 特に発声を伴う音楽活動に大幅な制限がかけられる中, 宮城教育大学で合唱や声楽の授業を実施できるのか, さらには開講すること自体が学生の健康リスクを高めることにつながるのではないかと非常に悩んだ。しかし, 前期授業が全て遠隔で実施されることになり, 授業における受講生の感染について当面は心配する必要がなくなったことと, 将来教壇に立つことを目指す学生と共に, 広く音楽活動が制限される中で果たしてどのような音楽活動の可能性があるのか考える機会にできるのではないかと考え, 音楽実技も含めた担当授業

* 音楽教育講座

1 文部科学省(2020) p.8.

2 東京都教育委員会(2020) p.5.

3 仙台市教育委員会(2020) p.6.

の全てについて、本学の授業開始日に合わせて実施することを決定した。

本論文では、筆者が2020（令和2）年度前期に担当した授業の中から、前半7回を遠隔授業として始め、後半8回は対面と遠隔とを同時に実施した「合唱」を取り上げ、コロナ禍で音楽実技を伴う「合唱」授業をどのように実践したのかを述べつつ、その成果と課題について考察することとしたい。

2. 「合唱」授業の実践（遠隔授業と対面授業）

2.1. 授業の概要

授業科目「合唱」（通年2単位）は、音楽教育専攻（中等教育教員養成課程）では必修の専門科目として、音楽コース（初等教育教員養成課程）では選択必修科目として、木曜日の第4時限に音楽棟第4演習室で開講し、筆者が単独で担当している。全学年が履修対象で重ねての履修も可能だが、例年1年次の履修が多く、上級生は重ねての履修が多い傾向が見られる（表1）。今年度の受講者数は33名であるが、第1回目の授業の中で、コロナ禍における合唱活動の現状等を授業者から説明したうえで、いつ対面授業ができるかの見通しは現時点で立てられないことを伝えた結果、数名の学生が履修を取りやめた経緯があった。しかし過去5年間の受講者数と比較しても、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた今年度も、受講者数としては例年に近い登録数があったと捉えられる（表1）。

「合唱」は音楽の専門教育科目であり、音楽コースまたは音楽教育専攻の学生が多数を占めている。ただ

し、例年ほかのコース・専攻からも数名の受講があり、今年度は4名の履修があった（数学コース3年，理科コース2年，美術コース2年，数学教育専攻2年から各1名）。音楽を専攻する学生は女子の割合が多く、例年，混声合唱のパートのバランスは適当とはいえないが、今年度は男声3名と特に少なく，混声四部合唱の場合はテノール1名，バス2名でパート分けをしている。

同授業の目標として設定しているのは、以下の3点である。様々な時代や様式の合唱作品の演奏や鑑賞を通して、合唱作品について①知識・理解を深め、②演奏法、③指導法について学ぶ。テキストにはNHK全国学校音楽コンクールの課題曲（小学校・中学校・高等学校）を指定し、そのほかの教材については、毎回の授業の中で指示を与えつつ取り組んでいる。ただし、今期は全面的な対面ができないという制約の中で、受講生にとって効果的な選曲について検討を重ねた。

連絡事項や楽譜・課題等の配布、アンケートの回収にはGoogle Classroomを用いた。オンライン授業の実施に当たりZoomソフトを使用した。その理由として以下の5点があげられる。第一に、授業での使用に関して、Google Meetと比較して接続が安定していると感じられたこと、第二に、学生が発表する際に画面共有等の操作がしやすいこと、第三に、音声の調整ができること、第四に、録画の管理がしやすいこと、第五に、受講生の出席状況について授業の終了後からでも確認できることである。Zoomの機能を全面的に授業で活用するため、6月以降は筆者個人で有料アカウントを取得した。

パート別に分かれて行う練習は、Zoomでは教員がホストとして接続中に同時に別のルームを立ち上げることができないため、Google Meetを使用した。また、毎時の授業後にGoogle Formsにより全受講生に授業アンケートを取り、学生による発表の感想を回収して発表者にフィードバックし、接続状況や授業の感想、改善点や授業に対する要望について聴取を行い、その後の授業づくりに反映していった。

表1 「合唱」の受講者数の推移

開講年	受講者数	学年別受講者数			
		4年	3年	2年	1年
2020年	33名	5	7	3	18
2019年	42名	15	8	0	19
2018年	36名	12	3	2	19
2017年	45名	12	8	4	21
2016年	36名	9	9	1	17

4 令和2年5月2日開催の第2回教授会で対面授業の一部再開について周知があり、対面授業の再開希望について事前調査が実施された。6月1日には全学に向けて『新型コロナウイルス感染症への対応について 第16報』で周知された。

2.2. 前期授業の日程と内容

本学では2020（令和2）年度の前期授業は全て遠隔で実施されることとなったが、6月29日からは実技、実験、実習の一部で対面授業（第1段階）が実施された⁴。演習である「合唱」も、申請の結果対面での授業実施が認められ、第8回の7月2日から一部で対面を取り入れつつ、対面とオンラインを同時に実施する形で授業を行った。授業の実施方法の具体については、2.4.2で詳述する。

表2 令和2年度「合唱」の内容と授業形態

回	日程	内容	授業形態
1	5/14	オリエンテーション、合唱演奏の基礎鑑賞）2019年度萩音楽祭	遠隔
2	5/21	鑑賞）ベートーヴェン《交響曲第九》(1) ○ネデラルコフ《五月の風船》	遠隔
3	5/28	鑑賞）ベートーヴェン《交響曲第九》(2) 学生による合唱曲の発表（以下継続）	遠隔
4	6/4	NHK 全国学校音楽コンクールについて ○NHK コンクール課題曲（小学校）	遠隔
5	6/11	↓（継続）	遠隔
6	6/18	鑑賞）オルフ《カルミナ・ブラーナ》	遠隔
7	6/25	鑑賞）NHK コンクール課題曲（中学校）	遠隔
8	7/2	○ドヴォルザーク《懐み深い娘》	対面① + 遠隔
9	7/9	↓（継続）	対面② + 遠隔
10	7/16	○NHK コンクール課題曲（中学校）	対面③ + 遠隔
11	7/23	○モリコーネ “Nella Fantasia”	対面① a + 遠隔
12	7/30	↓（継続）	遠隔
13	8/6	↓（継続）	対面② a + 遠隔
14	8/13	○NHK コンクール課題曲（高等学校） ○ウィリアムズ “SLEEPYTIME BACH”	対面③ a + 遠隔
15	8/20	↓（継続）	対面① a + 遠隔

（○は演奏曲を、○数字は対面ローテーションの順番を表す）

全15回の授業内容と授業形態は、表2に示す通りである。各授業の内容について、遠隔授業で実施した前半の第1回～第7回と、対面とオンラインを同時に実施した後半の第8回～第15回とに分けて、以下に述べることとする。

2.3. 第1回～第7回（遠隔授業）

前期の「合唱」は、5月14日から8月20日までの全15回で授業を実施したが、そのうち初回から6月25日までの7回はオンラインによる遠隔授業であった。授業で取り上げた楽曲数は前年度より大幅に減少し、前年度の2019年度前期が演奏曲16、鑑賞の機会4であったのに対し、今期は演奏曲7、鑑賞の機会4（うち1曲は2週をかけて）であった。今期の演奏曲が減った理由として、1曲を仕上げるまでの時間と、受講生の状況を確認しつつ授業を進めることに時間を要したことが要因の一つと考えられる。また2019年度は、筆者の主催する演奏会に「合唱」授業の受講生が出演したために、授業の中で多くの曲が取り上げられた経緯もあった⁵。

前半の7回では、オンラインでも支障なく学修が可能な鑑賞の時間を多く設けることとした。しかし、一部対面を実施した第8回以降は、対面授業の運営に多くの時間を要することとなり、授業者の用意する鑑賞の時間は設けることができなかった。しかし第3回以降は、毎回の授業で2名の学生が発表する合唱曲を鑑賞する時間を設けたことで（2.3.1.に後述）、さらに26曲を鑑賞することになった。

第1回目の授業では、合唱を取り巻く現状について筆者から話をする時間を冒頭にとった。授業を開講するに当たり非常に悩んだこと、教員として勤務している卒業生も児童生徒にまだ会うことができず、今後もしこうした事態は起こりうること、最初は例年と同じ授業ができず苦勞をかけるかもしれないが、このような困難にあっても何ができるか一緒に考えていくことができると伝えた。合唱練習を再開した高等学校や大

5 2019年7月24日に太白区文化センター楽楽楽ホールで開催された「大中恩作品演奏会」で、受講生は《阪田寛夫の詩による六つのこどものうた》ほか数曲を演奏した。

6 宮坂麻子 2020, p.21.

7 毎年2月に宮城教育大学の講堂で開催され、授業の成果発表のほか、学生および卒業生の演奏発表が行われる。2019年度は第44回音楽祭が2月14、15日に開催され、合唱授業は井沢満作詞、武満徹作曲《鳥へ》と、林望作詞、上田真樹作曲《童声（女声）合唱組曲 あめつちのうた》より〈3.風のうた〉を演奏した。

学グリークラブの活動について紹介し⁶、全国的に演奏会が中止を余儀なくされている現状や、仙台市内の合唱団も軒並み活動休止中である等の現状を伝え、授業の説明に入った。

2.3.1. 取り上げた作品(鑑賞)

本項では、前半7回の授業における鑑賞について述べる。第1回で取り上げた鑑賞は、前年度に本学の講堂で開催された「萩音会音楽祭⁷」であり、授業の成果発表の録画であった。この時点ではまだ授業の先行きに対する不安を拭うことは難しかったが、本授業の成果発表を鑑賞することで、今期の授業に対する見通しを持たせようとした。

つづいて、ベートーヴェン作曲《交響曲第9番》⁸を二週にわたり鑑賞した。本楽曲を取り上げた理由は、今年がベートーヴェンの生誕250周年に当たり、中学校や高等学校の教科書でも鑑賞教材として広く掲載され⁹、アルトリコーダーの導入にも活用されるなど¹⁰、合唱に関連した教材性の高い作品であることを受講生に理解してほしいと考えたからである。作曲者や作品成立の背景、第4楽章の音楽構造について説明しながら、バルリンの壁崩壊時の記念演奏¹¹を用いて鑑賞した。スライドの作成や動画の編集、動画の接続テストなど、授業の準備に当たっては非常に多くの時間を要することとなった。

つづいて、今年が生誕120周年に当たるオルフの作品から《カルミナ・ブラーナ》¹²を取り上げた。本楽曲も高等学校の教科書で部分的に鑑賞教材として掲載されているが¹³、声楽や合唱の教材としてさらに活用の幅を広げられるよう、作品全体について鑑賞した。NHK 全国学校音楽コンクールについては、新型コロナウイルスの影響で2020年度は開催中止となったが、

その経緯や主催側の対応について、また、同コンクールの歴史についても、例年以上に時間をかけて理解を深める機会とすることができた。

鑑賞に関連して、第3回以降の毎回の授業では“My Favorite Chorus”と題して、受講生が二人ずつ各々が愛好する合唱曲について発表する時間を設けた。受講生のアンケートに、この企画を通して、受講生同士が互いの合唱経験について理解し合い、合唱に関する知識も広げることができたと、感想の記述があった。また、発表する側も受ける側も、音楽について言語化して相手に伝えるトレーニングにもなっていたと考えられる。なお、受講生の発表に当たっては、音源を用いた発表の際に必要な Zoom の設定についてスライドを作成し、事前に Google Classroom で提示した。

また、授業の中でコロナ禍における学校や音楽教育界、演奏団体等の最新の動向や感染対策の方法について情報を提供しつつ¹⁴、その中で得られた知見も、前期の後半で実施される対面授業での感染対策に取り入れていった。

2.3.2. 取り上げた作品(演奏)

例年は初回の授業で、歌声の中に聴き取れる倍音を体感しながらハーモニーをつくる体験をしている。今期の第1回でも、音声のタイムラグの問題でタイミングやリズムは合わせられなくても、各パート同士が歌声を引き伸ばしつつ音を重ねることで上記の体験ができないかと試したが、多く的人数で同時に歌声を発すると全体の音声がほとんど聴き取れなくなってしまった。オンライン合唱は、音声のタイムラグのほかに、多人数で一斉に音を出した際にも音声が聴き取りにくくなるという課題のあることが明らかとなり、現時点では、オンライン上で全員が参加して合唱を演奏する

8 1824年作曲の独唱と合唱を伴う交響曲。歌詞はシラーの頌詩『歓喜に寄す』と、ベートーヴェン自身の作詞が一部に用いられる。

9 小原光一ほか 2017a, pp.48-51, 小原光一ほか 2017b, pp.136-137.

10 第4楽章の主題が、小学校ではソプラノ リコーダーに(小原光一ほか 2020, p.79)、中学校ではアルトリコーダーに、表現教材として用いられている(小原光一ほか 2016, p.8)。

11 1989年12月15日、レナード・バーンスタインの指揮により、東西ドイツとアメリカ、ソ連、イギリス、フランスの6カ国からなるオーケストラとソリスト、合唱団により東ベルリンで演奏された。

12 1936年にカール・オルフが作曲した、独唱と合唱と大規模なオーケストラによるカンタータ。13～14世紀にかけて書かれた流浪僧や吟遊詩人、ベネディクトのポイロン写本をテキストに、主題の反復と簡潔な形式や和声、際立ったリズムを特徴とした作品。

13 小原光一ほか 2013, pp.52-53.

14 日本放送協会 2020ほか。

15 リアナ・ダスカロヴァ作詞、フリスト・ネデヤルコフ作曲、中山知子訳詞。

ことは難しいと判断された。

第7回までの遠隔授業で演奏する場合は、受講生は自らの音声をミュートにして、ほかの接続者に聞こえない状態にしたうえで、ピアニストの音のみを聴きながら画面に向かって歌った。ほかの受講生の歌声が聞こえない状態で歌うことは、「合唱」を演奏しているとは言い難いかもしれない。しかし、オンライン授業においても合唱を演奏する力を育てることができないかと考え、以下のような取り組みを行った。

最初に取り上げた合唱作品は、二声によるブルガリアの児童合唱作品であるネデルコフ作曲《五月の風船》で、日本語の訳詞で演奏した¹⁵。Allegro で変ニ長調、4分の2拍子の生き生きとしたピアノ伴奏に乗せて、旋律は流麗で叙情性があり、中間部で登場する大きなフレーズと相まって、子どもでも心地よく歌うことのできる合唱曲であり、季節にふさわしい曲としても選曲した。筆者が各パートの旋律をピアノで弾いて両声部の音取りをした後、受講生は用意されたピアノ伴奏の音源に合わせて各自で歌った。両方の声部の旋律を歌えるようになることで、二声が重なる音楽のイメージを自らの中に作り上げることができる。すると、片方のパートを歌っていても、既に体験しているもう一方の旋律が内的に感じられ、自らの中でハーモニーを響かせて歌うことができる。実際に聴こえる音に合わせて演奏するばかりでなく、内的に聴こえるパートと合わせて演奏できる技能は自律した演奏にもつながる。このように、お互いの歌声を聴くことができない状況の中で、合唱を演奏する力を育てることについて考えつつ授業内容を検討していった¹⁶。なお、この曲のピアノ伴奏の音源は、まだ遠隔授業に慣れていない受講生の負担を考慮し、筆者が学年担任を務めるクラスの学生に予め収録を依頼したものを使用した。

その後は、対面授業で実際に声を合わせて歌うことを目標としつつ、第87回(2020年度)NHK全国学校音楽コンクール小学校の部の課題曲《好奇心のとびら》¹⁷に取り組んだ。この曲は四分音符=140~148とテンポが速く、ロ長調で歌い出しから跳躍音程が多いなど、取り組み始めた時期のアンケートには、オンラインでの練習に難しさを感じているという感想も見られ

合唱(音楽棟第4演習室)

対面授業の実施にあたって

1. 感染対策

①授業前後

- ・登校前に自宅で検温し、体調に問題がある場合は絶対に登校をしない。
- ・移動中の公共交通機関等ではマスクを着用し、感染を防止する。
- ・手洗いを心がけ、授業開始前と開始後にアルコール除菌を行う。
- ・会話の際にはマスク着用を心がけ、必要以上の長時間の会話を避ける。

②授業中

- ・対面授業に参加する全員がマスクを着用する。
- ・教員の前に、アクリル板か透明なシートを設置し、飛沫を防止する。
- ・互いに1m以上離れ、体の方向を1箇所を集めないようにする。
- ・授業時間中も窓を開放するほか(5~10cm)、30分ごとに換気をする。
- ・ピアノの使用後は、クリーナーを用いて消毒する。
- ・教室の使用後は、扉を開放して換気をする。

2. 授業の運営

- ・対面授業への参加人数を、10名前後で週毎のローテーションを組む。
- ・ピアニストの予定も考慮しつつ、参加する学生を決定する。

※上記の内容は、必要に応じて加筆・修正をすることがあります。

図1 『対面授業の実施にあたって』

たが、作品の構成等も分析しながら練習に取り組んでいき、その後のアンケートでは、対面授業に対する期待を込めたコメントが複数見られるようになっていった。

また、この曲ではパート別の練習が必要と考えられたため、Google Meetを用いたパート練習を行うこととした。各パートから選出されたパートリーダーとピアノ担当の学生のみ音声聞こえるようにし、ほかの受講生は音声をミュートにして切った状態で、パート別に設けたGoogle Meetに接続して練習を行った。しかし、ミュートにして練習を受けている側からの反応がパートリーダーとピアノ側に伝わりにくく、練習を進めづらかったと学生のアンケートに記述が見られた。なお、この曲は同声二部合唱として書かれているが、女声と男声の中でそれぞれ二部に分けて演奏した。

その後の対面授業の実施を迎えるに当たり、授業の実施方法や感染対策について授業の中で受講生に説明を重ねつつ、対面授業の参加希望について学生の意向を個別に確認した。そして、決定した対面参加のローテーションを第7回の授業で発表し、『対面授業の実施にあたって』として、対面授業に参加するうえでの注意事項を配布した(図1)。全受講生33名のうち、

16 コダーイは、読み書きのできる音楽家の特徴として、内的聴取をあげている(L. チョクシーほか1994, p.136)。

17 原ゆたか作詞、田中公平作曲、横山裕美子編曲。

対面授業への参加を最初に希望したのは27名であった。

2.4. 第8回～第15回(対面授業を加えた遠隔授業)

2.4.1. 感染対策について

図1に示した通り、対面授業の実施に当たり、学生には以下の諸点について徹底を求めた。検温をはじめとする自らの健康管理と、感染防止の除菌や消毒の徹底、公共交通機関等での移動中のマスク着用など、感染防止の意識を常に持って行動することとした。複数人が集まり発声を伴う「合唱」授業にとって最も重要な飛沫感染対策として、演奏中も含め、授業中は終始マスクを着用することとした。またピアノを使用する際は、ピアノの鍵盤専用のクリーナー¹⁸を用いて、ピアノを弾く教員または学生が交替する度に消毒を行った。また、授業の中でどのように換気や感染対策を行うかを示し、受講生が緊張感を保ちつつも安心して対面授業に参加できるよう配慮した。受講生には、対面での参加に当たりわずかでも不安があれば、毎回の授業後に実施するアンケートで申し出るよう伝えたが、授業での感染対策により安心して授業に参加できているというコメントが複数寄せられた。

2.4.2. 対面授業の実施方法

授業を実施する音楽棟第4演習室は、受講生全員が一斉に合唱を演奏する場所として決して十分な広さとはいえない¹⁹。そこで対面授業が認められた後も、感染のリスクを下げるために同時に集まる人数を極力減らそうと、対面授業を遠隔授業と同時に実施すること

とした。33名の受講生を、パートごとに学籍番号順に3つに分けてローテーションを組み、1グループが対面授業に出席し、ほかの2グループはオンラインで配信される授業に接続して、別の場所から出席した。オンラインで出席する学生のZoom画面は、対面授業を行っている演習室のプロジェクターに拡大投影することで、オンライン参加者が演習室の演奏に合わせて一緒に歌う様子を確認しながら、授業に参加する全員が一つとなって合唱を演奏する雰囲気を感じ取れるようにした。また、学生による発表についても、個別に端末を用意せずに対面で参加している受講生も演習室のプロジェクターで共有できるようにした。学生による発表は、対面参加者のローテーションにより、演習室から行われる時も、オンライン上から行われる時もあった。

授業者の映像と対面参加者の音声はノートパソコンから配信し、もう1台別に用意したスマートフォンのカメラで、対面授業に参加する受講生全体の様子を撮影して映像のみ配信し、オンラインで参加する受講



図2 「合唱」における対面授業の様子(1)



図3 「合唱」における対面授業の様子(2)

18 河合楽器製作所製「ピアノ鍵盤クリーナー KEY WHITE」。

19 床面の広さが117m²、ステージの広さが31m²。

生が、どちらの映像も見ながら授業に参加できるようにした。なお、表2で第12回が「遠隔」となっているのは、授業開始前に受講生1名から発熱の症状が見られたと報告があったため、大事を取って対面の予定を変更し、オンライン授業として実施したためである。

オンラインで参加する学生の受講場所について、全ての授業が遠隔授業であった前期の前半は、全員が自宅から接続していたが、6月29日の対面授業開始に合わせて、音楽棟個人練習室の使用が条件付きで認められた後は、自宅で音を出すことのできない学生も個人練習室から接続して出席することで、オンラインでも思い切り歌う姿が見られるようになった。

2.4.3. 取り上げた作品と授業の内容

7月2日の第8回が対面授業の第1回目であった。仙台市内でも合唱団の活動が一部再開され始めたことを報告しながら、6月29日に公表された全日本合唱連盟による感染拡大防止ガイドライン²⁰の内容を紹介し、換気の実施方法をはじめ²¹、今後の対面授業運営の方法について確認した。

発声の後、合唱の導入として、後期ロマン派の作品から、ドヴォルザーク作曲《モラヴィアの二重唱》から〈慎み深い娘〉を日本語の訳詞で演奏した²²。Larghetto、4分の2拍子で変イ長調のこの曲は、家族で歌うための小品として書かれながらも美しいハーモニーと旋律を持ちあわせており、上声部と下声部が男女二役となり、声の掛け合いと重ね合いで演奏する形で書かれている。対面授業の最初に、柔らかい歌声で互いのパートを感じ取りながら声の重なりを感じ取ってほしいと考え、この曲を選曲した。

また、この日まで4回にわたりオンラインで練習を重ねてきた、小学校の部の課題曲《好奇心のとびら》を遂に合わせて演奏することができた。演奏が終わり、マスク越しに見えた受講生の充実感に満ちた表情を忘れることはできない。この日の受講生の感想から、い

くつかのコメントを取り上げておきたい。「ハーモニーを初めて感じる事ができて、嬉しかったです」「合唱、久々にできてすごく楽しかったです」「不思議な感覚でした。これまでは同じ空間で歌えることが当たり前だったはずなのに、それができなくなり、…(中略)…ハーモニーになった瞬間に泣きそうでした。一人で歌うことでは味わえない何かが合唱にあることを改めて感じられました」「対面で歌っているみんなの歌声とともに自分も歌うことで、合唱がひさしぶりにできたなという感じがありました」。

受講生はこの《好奇心のとびら》をほぼ歌えるようになっていたが、オンラインで練習した曲を実際に対面で演奏するという体験を全員ができるよう、続く2回の授業でも取り上げた。このように学生の様子を見ながら行った授業内容の変更も、今期取り上げた曲数が例年より減少した要因の一つである。

この曲と並行して、同コンクール中学校の部の課題曲《足跡》²³を取り上げた。この作品はポピュラー音楽をベースに書かれており、歌われる歌詞の多さやシンコペーションを多用したリズムなど、オンラインで合わせるには小学校の課題曲とは異なる難しさをもっている。さらに休みなく全パートが歌い続けるため、マスクをしたまま演奏するには体力的にも厳しい。毎回の授業はZoomで録画していたが、この曲に入ってから録音される音質の状態が特に悪くなったと感じられた。その原因として、機器に入力される音楽の情報が増える一方で、ソフトや通信環境の側がそれを消化しきれていないのではないかと考えられた。

また、対面授業でのパート別練習は、ソプラノとアルトが第4演習室と第1演習室²⁴を交互に、テノールとバスが第3演習室²⁵を使用して行った。その際にオンラインで参加している学生もGoogle Meetを通して参加した。対面が始まってしばらくは、対面授業の参加者のみが各演習室でパート別に分かれて練習をしていたが、受講生から、パート別に分かれる時は人数

20 一般社団法人全日本合唱連盟 2020.

21 演習室の双方の窓は常に開放し、30分ごとに5分間の換気休憩を取り、2台のサーキュレーターを互い違いの方向に向けて稼働して室内の空気を入れ替えを行った。

22 1876年作曲。《モラヴィア二重唱曲集 第3集》より“Die Bescheidene”，中山知子訳詞。モラヴィア民謡集を素材とする。

23 Little Glee Monster 作詞，KOU DAI IWATSUBO / Carlos K. 作曲，上田真樹編曲。

24 床面の広さは49m²。

25 床面の広さは32m²。

が分散して少なくなるので、広い第4演習室で練習しているパートは、個人練習室でオンライン参加している学生も合流して一緒に練習をしたいと提案があり、採用したところ、対面参加の機会が増えることとなり、受講生には好評であった。

つづいて、パートがより多く分かれる作品に取り組んでいった。オンラインの続いた前期のうちに対面を取り入れることができたことで、まずは実際に声を出して歌う感覚を味わわせたいと考え、モリコーネ作曲“Nella Fantasia”²⁶を選曲した。イタリア語で歌われるこの曲は、もとはオーボエで演奏される映画音楽であったが、ソプラノ歌手サラ・ブライトマンが作曲者に何度も掛け合い歌詞を付す承諾を得て生まれた作品である。また、作曲者のモリコーネが今年の7月6日に死去したばかりであり、受講生に新聞記事を引用しつつその功績について紹介した。それまでに取り上げた作品より多くのパートに分かれる部分があること、イタリア語であるため発音しやすく、声楽的に無理なく歌うことができること、美しい旋律を持ちつつ歌詞は平和に満ちた世界を歌う内容となっており、コロナ禍にある受講生がハーモニーを感じつつ、歌詞に込められた思いを歌声にできたらと考え選曲した。

なお、この作品を取り上げた第11回から対面ローテーションの二巡目に入るが、授業アンケートの中で、ほかの学年とも交流したいので学年を混在したメンバーにしてほしいと希望があり、ほかの受講生にも了承を得て、新たに作成したローテーションでその後の対面授業を実施した。また、一巡目では対面に参加していなかった6名の受講生のうち、この時点で対面参加を希望した4名が、二巡目から対面に参加することとなった。

8月13日の第14回からは、第87回(2020年度)NHK全国学校音楽コンクール高等学校の部の課題曲《彼方のノック》²⁷に取り組み始めた。例年であれば前期のうちに同コンクール課題曲の小・中・高を全て歌い終え、受講生は夏季休業期間中に各地で開催される合唱コンクールを参観したり、ボランティアで各学校での指導に入ったり、ピアニストとして各学校のコンク

ル出場を支援するなどしてきたが、今回は前期授業が残り2回となった時点で、ようやく同曲の練習に入ることができた状況であった。しかし、前期終了前に作品の概要を掴んでおくことで、作品と後期の授業に対して見通しを持つことができ、夏季休業期間中に作品について自ら研究することにもつながる。残り2回で曲を仕上げることは困難で、区切りとして中途半端になってしまう可能性を想定しつつも、この時点であえて取り上げることにした。

そのほかに、J. S. バッハ作曲《カンタータ140番》²⁸の4曲目をジャズ風アレンジし、スキヤットで歌われる“SLEEPYTIME BACH”²⁹を取り上げた。本来はテノールの歌うコーラル旋律と管弦楽、通奏低音による音楽であるが、混声合唱で歌うことができるよう器楽パートも合唱としてアレンジされている。声楽と器楽という違いはあっても、音楽はほぼオリジナルに沿って書かれており、バッハの音楽の特徴を体験しながら合唱として歌うことができるようにつくられている。複数のテーマが関わり合って音楽が構成される中でコーラル旋律が登場する。受講生には各パートの音楽を聴き取りながら歌い、自らのパートの役割について考えつつ全体のアンサンブルをつくり上げていく目標を持って取り組んでほしいと選曲した。コントラバスやスネアドラムと合わせて演奏もできるため、後期には、ピアノ以外の器楽と重ねて歌うことも視野に取り組んでいくことができると考えている。

3. 受講生のアンケートから

前期15回の授業終了後に、「合唱」授業全般に関するアンケートを実施し、全受講生33名中31名から回答が得られ、様々な感想や意見が寄せられた。質問項目別に回答を取り上げつつ、今回の授業の成果と課題について検討することとしたい。なお、同アンケートは受講生の状況把握と授業運営の改善等を目的として前期最終授業の終了日に実施したもので、回答は全て自由記述法となっている。

26 Chiara Ferrau イタリア語作詞, Audrey Snyder 編曲。

27 辻村深月作詞, 土田豊貴作曲。

28 1731年作曲。“Wachet auf, ruft uns die Stimme”。

29 Bennett Williams 編曲。

3.1. 遠隔授業で大変だったこと

「遠隔授業で大変だったことはなにか」という質問に対して、以下の通り回答があった。「全員で通して歌ったりするときに、画面が一瞬止まったり、乱れが生じたりして、どうしてもずれが生じてしまった」「(オンラインで参加している時)対面の人と合わせて歌う際、伴奏やみんなの歌声が聞き取りにくく、何度もずれてしまった」「みんなと合わせないと合唱している気分にならなくて寂しかった」「他の人の声が聞こえづらいので、ハーモニーの感覚をつかむことが大変でした」。

問題がなかったと回答した学生もいた一方で、オンラインでは、音声か乱れたり途切れたりして歌いづらかったと13名から回答があった。タイムラグによる音声のずれで歌いづらかったという回答も10名からあった。そのほかに、自宅では思い切り歌えない、合唱している気分にならなかった、ハーモニーの感覚をつかむことが大変だったという回答があった。筆者も含めほとんどの学生が無線LAN環境で接続し、通信速度の充分でない機器で接続している学生も相当数いると考えられるが、よりよい通信環境の実現に向け調査・検討を重ねていく必要があると考える。

3.2. 遠隔授業で良かったと思うこと

「遠隔授業でよかったと思うことはあるか」という質問に対して、以下の通り回答があった。「どこからでも受けられること」「感染リスクが少ない状態で安心して歌を歌うことができた」「資料が見やすい」「合唱の鑑賞で色々な合唱を知ることができたり、曲の背景や歴史を学ぶことができたことが、とてもよかったと思います。オンラインであっても、共有することができる実感をもつことができましたし、先生や学生のみなさんの紹介により合唱への視野が広がったと思います」「対面で歌える喜びが倍になった。…(中略)…Zoomだと顔の下に名前が出るので、初対面の人とも顔と名前を覚えやすかった」「音程を確実にとりながら歌えた」「少しコンピュータに強くなった気がします」「自宅や練習室にいるときでも簡単に大人数で合わせ練習ができる」「自分の声と向き合って歌えた」「あまりない」。

感染対策が取れ安心して参加できたという回答は3名と思いの外少なかった。どこからでも受けられる

という回答が4名、鑑賞や学生による作品紹介が有意義であったという回答は5名であった。そのほかに、資料の見やすさや、音程を確実にとることができた、自らの声と向き合うことができたという回答が見られた。また、機器やソフトの使用に関連して、コンピューターの操作に強くなった気がする、画面表示を通して初対面の人を覚えられたという回答が2名からあった。遠隔授業を経験したことで、対面で歌う時の喜びが増したという回答は、授業全体の感想の中にも見られたが、この質問項目でも3名で見られた。離れた場所からでも歌声を合わせられることを肯定的に捉える回答も見られた。一方で、遠隔授業に良い点は特になかったという回答が2名、無回答は4名であった。

3.3. 今後の改善点と、そのままでもよいと考えること

「今後も遠隔授業を取り入れる場合、改善できたら良いと考えること、そのままでもよいと考えることがあるか」という質問に対して、以下の通り回答があった。「遠隔と対面を同時にやることは続けてほしい」「少人数でもハーモニーを感じて歌うことができ、また一人ひとりしっかり歌うと思いました。ソーシャルディスタンスが必要と思うので、丁度よいと感じました。ローテーションも組み換えをして下さり、あまり関わりがなかった一年生と授業を受けられ、また毎回響きが違うことも楽しかったです。…(中略)…改善出来たらと思ったのは、マスクでの歌唱です」「『My Favorite Chorus』のような様々な合唱を聴く機会はそのまま継続してほしい」「カメラの設置により、参加者の方の様子を見られるのが良い」「パート練習ではオンラインで参加している人達も対面の人たちに参加するというのはとても良い」「音質がやはり気になりますが、機器の限界があると思うので、今の状態を継続する形が良いと思います」「毎回同じメンバーだと飽きてしまうので、ちょっとずつ変えてほしい」「3グループではなく2グループに減らして対面の回数を増やしてほしい」「伴奏のピアノの音がもう少しクリアに聞こえたらとてもありがたい」。

このままでよい、または遠隔と対面を合わせた授業形態の継続を求めた回答は19名であり、対面の回数を増やしてほしいという回答も1名見られた。そのほかにも鑑賞の機会や動画配信、パート練習の実施方法など、現在の授業形態を維持してほしいという回答が

見られた。一方で、音質面の限界に理解を示しつつも改善を望む回答や、マスクでの歌唱、ピアノの音質、対面ローテーションの内容に改善を望む回答が見られた。

3.4. 前期「合唱」授業全体の感想

授業全体の感想について、以下の通り回答があった。「対面授業で歌ったときの感動は忘れられません」「初めは、合唱の授業をオンラインでどのように受講できるのか想像できなかったのですが、実際に受講してみると、みんなの声に乗せて歌うことができ、家でも合唱ができるのだという嬉しさを感じました」「履修してよかったなと思いました。様々な制限はあったけどみんなと歌えるという状況は幸せで、もっと合唱が好きになったように感じます。後期もどう状況が変わってくるか分かりませんが、みんなと合唱をできる時間を大事にしたいと強く思いました」「これまで以上にみんなと一緒に歌うことの楽しさや、ハーモニーが生まれることなどの素晴らしさを感じることができました。普段できていることができなくなると、本当にその有難みが分かるものなのだと感じました。特殊な環境下での授業ではあったため、やはり少し不便に感じることもありました。そんな中でもしっかり合唱を学ぶことができたなと思いました」「My Favorite Chorusの発表は、色々な曲を知ることができたのはもちろん、自分が発表する曲についても思い出を振り返ったり曲について調べることができ、その曲がもっと好きになりました」「Nコンの曲を小中高の三曲全てできて良かった。校種によって種類の違った難易度を経験し、曲についての考察を深めることができた。また、Nコンの曲以外にも様々な曲に出会うことができて嬉しかった。後期も様々な曲に出会い、歌いたい」「オンラインは対面とはまた違う良さがあるなと思いました」「パート練習などお互いのことをあまり分からないまま進めていたので少し怖かった」「合唱を対面と遠隔で行うことで戸惑う事も多々あり、他の授業との兼ね合いが大変だったりもしましたが、合唱することは楽しいなあと改めて思いました」。

授業開始当初はオンラインで合唱の授業が成立するのか不安を抱えていたが、遠隔授業の不便さも良さも体験しつつ、対面で合唱を歌うことのできる価値を再認識できたという回答が複数見られた。前期の授業

において何らかの意義を感じたとされる回答は30名であり、My Favorite Chorusの発表を経験できた意義をあげた回答が5名、そのほかの質問項目で同発表の意義をあげた回答も7名あった。一方で、パート練習での不安や対面授業とほかの遠隔授業の出校との兼ね合いなど、授業者の把握していなかった受講生の負担についても回答が得られた。後期も引き続き学生の状況や意見を確認しつつ、効果的な授業の実施方法について検討を継続していく必要があると考える。

4. 前期「合唱」授業における成果と課題

4.1. 前期「合唱」授業における取り組み

本学での前期の授業の方針が決定され、担当授業の開講について検討していた時期の国内の状況は、合唱団やカラオケ店、ライブハウス等でクラスターが発生するなど、発声を伴う音楽活動については、特に慎重に検討する必要がある。その状況を受け止めたくうえで、学生の学修機会を確保するために万全の準備を講じて開講に向けた準備をしなければならないと考え、音楽活動や合唱に関する様々な情報収集を行い、まずは遠隔授業から開講し、そして、対面が認められた後は、遠隔に対面を取り入れた授業を実施することとした。

新型コロナウイルスの感染が拡大する中で、前期「合唱」授業を実践するに当たり取り組んだ諸点について、以下にまとめる。

- 遠隔授業では鑑賞の機会を増やし、受講生が効果的に学修できるように資料を作成した。
- “My Favorite Chorus”として、受講生が自ら合唱作品を選んで発表する機会を設け、発表を聞いた受講者の感想を発表者にフィードバックした。
- 遠隔授業の期間中も、オンライン上で一つの作品を同時に練習する場を設けた。
- 感染対策や教育界、音楽界の動向について受講生に情報提供を行い、対面授業の実施に向けた準備を重ねた。
- 対面授業の実施が認められた後は、人数を減らした対面と遠隔とを同時に実施する授業形態を取り、感染対策を講じ、受講生が安心して授業に出席できるよう配慮した。
- 対面授業の実施に当たり、出席前の検温や消毒、換

気等を徹底して行い、マスクの着用を義務付けた。対面授業への参加については受講生に強制せず、本人の意思を尊重した。

- 毎回の授業終了後にアンケートを実施し、通信状況や授業に改善を望む点について聴取しつつ、その後のよりよい授業運営について検討を重ねた。

4.2. 前期「合唱」授業における成果

前期「合唱」授業を実施した結果、成果として考えられる諸点について、以下にまとめる。

- 遠隔授業における端末を通じた鑑賞では、資料が見やすく落ち着いて鑑賞できる等の利点もあった。
- 学生による発表を通して、合唱作品について知識を広げると共に、音楽作品や自らの音楽体験について言語化し交換し合う機会を設けることができた。
- 遠隔授業における発表を通して、受講生が機器の操作や設定等を経験することができた。
- 遠隔授業の期間中も、鑑賞ばかりでなく、作品の練習や演奏に取り組む時間を設けることができた。
- 対面授業が開始した後も、遠隔授業と対面授業の同時実施を行い、感染対策を講じながら、受講生の不安に配慮して対面を実施することができた。
- 遠隔授業の期間を経て対面授業に参加した際、受講生は対面で声を合わせて歌う喜びやその価値を改めて感じる事ができた。
- 限られた人数による対面授業としたことで、対面に参加する受講生の意識が高まり、より自律した姿勢で授業に取り組むようになった。
- 新入生を含めた学生同士が交流する機会を提供することとなった。

4.3. 遠隔を伴う「合唱」授業における今後の課題

前期「合唱」授業を実施した結果、今後の課題として考えられる諸点について、以下にまとめた。

- 遠隔授業と対面授業の同時実施において、受講生の負担に配慮しつつ、いかに取り上げる楽曲数を増やし、授業内容を充実させることができるか。
- 遠隔授業で配信される音質やタイムラグの問題について、どのような改善策が考えられるか。
- 遠隔授業と対面授業の同時実施において、多くの時

間を必要とする感染対策や演習室の設営および撤収、教材の作成をいかに効率的に行うか。

- 今後も受講生に感染対策についての意識を継続して持たせつつ、十分な感染対策を講じることができるか。
- 現在の感染状況が今後も続く場合、授業の成果発表をどのような形態で実施するか。

5. おわりに

本論文では、新型コロナウイルス感染症が拡大する中で2020（令和2）年度前期に実践した「合唱」授業を取り上げ、その成果と今後の課題について考察した。授業の実施にあたっては、学内や講座教員からの遠隔授業に関する情報提供と、受講生の協力が不可欠であった。後期も引き続き受講生の意向を確認しつつ、遠隔と対面の同時実施による授業形態を継続する予定である。

音楽実技に関わる授業として、オンライン上でよりよい音質やタイミングで演奏できる方法について今後も調査・検討していく必要がある。例えば“SoundJack”³⁰というソフトは、使用条件や必要な設定はあるものの、特別な機器を用いずに、オンライン上でタイムラグをほとんど意識することなくアンサンブルをすることが可能である。

前期の最後まで遠隔で参加していた2名の受講生も、後期からの対面参加を希望しており、後期は全受講生が対面授業に加わる予定である。今後も可能な限りの感染対策を講じ、受講生の状況を確認しながら、受講生にとって「合唱」授業が学びある時間となるよう取り組んでいきたい。

30 <https://dev.soundjack.eu/>

参考文献

- 小原光一ほか 2013『高校生の音楽1』, 教育芸術社.
- 小原光一ほか 2016『中学生の音楽』, 教育芸術社.
- 小原光一ほか 2017a『高校生の音楽1』, 教育芸術社.
- 小原光一ほか 2017b『MOUSA1』, 教育芸術社.
- 小原光一ほか 2020『小学生の音楽3』, 教育芸術社.
- 仙台市教育委員会 2020「3. 各教科等における指導の工夫」『感染症対策に留意した各教科等の指導について【各教科等における指導の工夫】(5月22日時点)』.
- 一般社団法人全日本合唱連盟 2020『合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン 第1版』
<https://www.jcanet.or.jp/JCAchorusguideline-ver1.pdf>
(2020/9/30閲覧)
- チョクシー, L. ほか 1994『音楽教育メソードの比較』, 全音楽譜出版社.
- 東京都教育委員会 2020「感染症対策に留意した各教科等の指導」『都立学校版感染症予防ガイドライン(新型コロナウイルス感染症)』.
- 日本放送協会 2020.6.17『"可視化"でまるわかり! 新型コロナ対策』.
- 文部科学省 2020『令和2年度における小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における教育活動の再開等について(通知)』別添1『I. 新型コロナウイルス感染症に対応した学校再開ガイドライン』.
- 宮坂麻子 2020.5.12「合唱 日常からなくしちゃいけない」『離れていても みんなと音色を』, 朝日新聞, p.21.

(令和2年9月30日受理)